

令和7年度 校内研究実施計画書

Ⅰ 研究主題及び教科

〈研修主題〉	自ら問いをもち、学び続けるこどもをめざして ～地域に学ぶ生活科・総合的な学習の時間を通して～
教科・領域	生活科・総合的な学習の時間

2 主題設定の理由

(1) これまでの研修の成果と課題

本校では、昨年度より生活科、総合的な学習の時間を窓口とし、自ら問いをもち学び続けるこどもの育成を目指して、取り組んできた。各学年、様々な取り組みや工夫をしたことで、いくつかの成果とともに新たな課題も見えてきた。

1つ目は、体験や見学等で得た事実や事象から、自ら問いをもつこどもの姿が見られるようになってきたことである。これは、各学年に位置づけられている地域学習を探究のサイクルの視点から見つめ直し、地域学習が「問い」をもつための学習や、「問い」を解決するための学習に位置付くようにカリキュラムの工夫などを行ってきた成果である。また、体験や体験後の振り返りでは、見てきたことや聞いてきたことをもとに問いを作っていくという流れを大切にすることで、体験や見学時に問いをもとうとする意識も高まったと思われる。しかし、教師の働きかけがなければ、問いをもつことができないという課題も見えてきた。教師に「問いをつくりましょう」と言われて作った問いは、こども主体となって生まれた問いではない。こども自身が「知りたい」「考えてみたい」と思えるような問いにすることが大切である。教師は、こどもが自ら問いをもつことができるような、手立てを考えていく必要がある。

2つ目は、問いを解決するために自ら調べる姿が見られたことである。調べたことを持ち寄って話し合いを行うことで、憶測や予想だけでなく、根拠をもった話し合いになり、学びが深まる場面が見られた。しかし、問いを解決するためにインターネットで調べて、すぐに解決してしまい、学びが広がっていかないことが多かった。調べることに對して、手間をかけていないので印象に残りにくく、次の問いに繋がっていかないことも多かった。問いをもった後、それを追求していこうとする、こどもの姿勢にもまだ課題がある。そのため、学び続けるための手立てを考えていく必要がある。

3つ目は、教師の変容である。今年度の研修を通して、生活科・総合的な学習の時間に対する教師の意識に変容が見られた。これまでの総合的な学習の時間は、教師主導型になりがちであったと思われる。しかし、今年度はこどもから生まれた「問い」を大切にしたこと

で、こどもの興味・関心に寄り添いながら学びを展開することができた。このような学習を行うために、教師自身が地域をフィールドとして教材を発掘したり単元構想したりすることが必要となることが分かった。この考えを他教科にも活用し、探究的な学びを意識した授業作りをする教師も増加している。しかし、課題も見られた。それは、数ある問いをもとにどのように学習を展開していくかについてである。同じ体験や事実に出合った際も、こどもたちがもつ問いはさまざまである。それらの数ある問いを学級全体で一つの問いに絞って考えていくのか、個別最適を重視して各々で追求させていくかについて昨年度は悩むことがあった。どちらにしなければならないということはないが、教師はこどもの学びの状況をつかみながら判断できると良い。

4つ目は、教師が「探究のサイクル」（生活科の場合は「気づき→表現」）を意識できたことである。教師が常に探究のサイクルを意識し取り組みを行うことで、現在こどもがどの過程にこどもたちがいるのかを捉えられるようになってきた。しかし、意識することはできているものの、探究のサイクルが上手く回せなかったときもあった。それは、教師自身が地域教材をもとにした、年間の見通しをもつことができなかったためである。年間の見通しをもち、こどもになにを学ばせたいのか見通しをもつことが大切である。そのため教師が地域に足を運び、教材研究を十分に行っていかなければならない。また、運動会や社会見学等の大きな行事によって、学習が途切れてしまうこともあった。そのため年度初めに、カリキュラム・マネジメントを行い、各行事や各教科等の内容を関連づけてマネジメントしていくことが大切である。

このように、昨年度の研究で明らかになった、課題に継続して取り組む必要があると判断し、昨年度の主題を引き継ぐ方向となった。これにより、昨年度の成果を活かしつつ、より実践的で効果的な研究としていきたい。

（２）総合的な学習の時間のねらいと「生きる力」の育成

総合的な学習の時間では、「探究的な見方・考え方」を働かせることによって、課題を解決し、自己の生き方を考えていくための「資質・能力」を育成することを目指している。この「探究的な見方・考え方」とは、各教科で学んだ見方や考え方を総合的に活用し、広範な事象を多角的に捉えていく力である。具体的には、実社会や実生活の課題を探究し続けることで、自分自身の生き方を問い直し、考え続けることを意味している。本校の研修主題である「自ら問いをもち、学び続ける」ことは、総合的な学習の時間を進めるうえでの基盤になると考えている。

さらに、現行の学習指導要領（２０１９）では、「生きる力」の育成という教育の目標が設定された。教育課程に基づく個々の教育活動が、児童一人一人に、社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、自らの可能性を発揮し多様な他者と協働しながら、よりよい社会と幸福な人生を切り開き、未来の創り手となるために必要な力であるとされている。「総合的な学習の時間のねらい」と「生きる力」には密接な関係があ

り、生活科・総合的な学習の時間を通じて「自ら問いをもち学び続ける」児童を育成することは、「生きる力」の育成にもつながると考えている。

3 地域の特性

本校は地域教材に恵まれており、地域の方々も学校の教育活動に非常に協力的である。昨年度から、研修の教科・領域を生活科および総合的な学習の時間に設定し、地域学習に取り組んできた。その結果、一定の成果が表れている。こちらは、令和6年度の学校関係者評価である。

- ① 校内研修で、地域素材を活用した授業づくりに取り組むことで、地域に関心をもつ児童が増えた。
- ② 地域と学校で単元構想について話し合うことができた。
- ③ 年度初めにたてた学年のカリキュラムを実践していただきたい。「地域のモノ・人とつながる学習計画」をもとに教師自ら考え、チームで協働して調べ続けていただきたい。
- ④ 地域行事へのこども・保護者の参加が十分ではないという状況は、各自治体でも同じようなことが課題となっている。

①では、昨年度から地域に学ぶ生活科・総合的な学習の時間を見直し、地域から学ぶことを実践したことで、児童の地域に関する興味・関心の向上に繋がったと考えられる。

②・③では、地域の方に学校に来ていただき、話し合うことができたことの成果である。各学年の生活科・総合の学習と関係が深い方に、単元構造図や教師の意図を伝えたことで、教師と地域で共通理解をもつことができたので、学習が効果的に進んだ。

④では、本校を含め多くの地域において、地域行事へのこども・保護者の参加が十分と言えず、その参加率の低下が課題となっている。こうした傾向は、本校に限らず各自治体でも共通して見られる。地域と学校、家庭との繋がりをいかに再構築していくかが、今後の重要な課題となっている。新しい時代の教育や地域創生に向けた学校の連携と協働は必要不可欠であり、現行の学習指導要領においても強調されている。文部科学省（2019）は、地域の教育力の充実と地域における学校との協働体制の在り方についても言及している。

◆地域と学校がパートナーとして、共にこどもを育て、共に地域を創るという理念に立ち、地域の教育力を向上し、持続可能な地域社会をつくる必要がある。◆地域と学校が連携・協働して、地域全体で未来を担うこどもたちの成長を支えていく活動を「地域学校協働活動」として積極的に推進することが必要。◆従来の学校支援地域本部、放課後子供教室等の活動をベースに、「支援」から「連携・協働」、個別の活動から「総合化・ネットワーク化」を目指す新たな体制としての「地域学校協働本部」へ発展させていくことが必要。◆地域学校協働本部には、①コーディネート機能、②多様な活動（より多くの地域住民の参画）、③持続的な活動の3要素が必須。地域学校協働活動の全国的な推進に向けて、地域学校協働本部が、早期に、全小・中学校区をカバーして構築されることを目指す。

これまでの地域による学校への「支援」という一方的の関係になっていた枠組みを捉え直し、学校と地域が「連携・協働」し、双方向の関係を築くことが目指されている。

4 研究内容及び具体的な取り組み

自ら問いをもつために

(1) 体験活動・出会い学習

総合的な学習の時間に、児童が実生活や実社会に向き合う中で、自ら課題意識をもち、学び続けることが大切である。児童自ら課題をもつためには、教師がこどもの偶然の発見を待つのではなく、意図的な働きかけをすることが重要である。

意図的な働きかけの具体的な例としては、体験活動から課題や問いをもたせることである。昨年度の実践事例を紹介すると、1年生の「さつまいもの苗植え・収穫」3年生の「みかん狩り」5年生の「米作り」などである。体験活動後に振り返りを行うことで、感想だけでなく、次の問いをもつことに繋がった。体験活動を行うときにも教師は、以下の2点のことに留意する必要がある。それは、「事前に児童の発達や興味・関心を適切に把握すること」「これまでの児童の考えとの「ずれ」や「隔たり」を感じるように工夫すること」である。その点を意識した働きかけを行うことで自ら問いをもつ児童の育成につながる。その他にも、地域ならではの建造物や行事、それに携わる人との出会いである。それに携わる人との出会いでは、実際の様子を見たり、話を聞いたりすることで、「自分も深く関わりたい」「自分の予想していたこととは違った」という対象へのあこがれや価値観の違いを抱かせることができた。人との出会いや体験活動が、問いを見つけさせることに繋がると考えられる。

自ら問いをもつために

(2) 整理分析の時に、思考ツールやカードを活用する

すべての教科・領域で取り組みたいことは、整理分析の際に、思考ツールやカードを活用することである。すべての授業の中で、児童が思考する場面が必ず訪れる。その際に、児童の思考をどれだけ分かりやすく整理できるかどうかで、新たな問いや課題が見えてくるかどうか、違ってくる。その思考の整理のために、主に2つの手立てが考えられる。1つ目は、思考ツールの活用である。思考ツールには、ベン図・ウェビング・KJ法・チャートなどの様々な種類がある。思考ツールを活用することで、思考の整理分析・多角的な視点の獲得・関係性を明確化することができる。2つ目は、思考スキルのカードを積極的に活用することである。教師が、意図的にカードを活用して授業を行うことで、児童も自身の思考を整

理して、考えを明確にしようという意識が定着すると考えられる。また、教師がカードを活用することで可視化されて、どの児童にとっても分かりやすい授業となる。

自ら問いをもつために

(3) 振り返りに問いを書く

自ら問いをもち探究的に学ぶということは総合的な時間だけでなく、すべての教科・領域に関して今の時代に求められる資質・能力である。そのため、自ら問いをもつための教師の働きかけは、総合的な学習に関わらず、全ての教科において継続的に行うべきである。その取り組みが、「振り返り」である。

「振り返り」を書く理由は、主に3つが考えられる。1つ目が、その日授業で理解したことを言語化することで、知識が定着しやすくなるということだ。2つ目が、「分かったこと、分からなかったこと」を書くことで、自分の学習状況が把握しやすくなるということだ。そして、3つ目が、振り返りを通じて疑問点を明確にし、次の授業の課題や目標をもつことである。毎日の授業で振り返りを書く際に、疑問点を明確にする（問いをもたせる）ということの指導を継続的に行う。このような指導の積み重ねにより、どの教科・領域においても自ら問いをもつという意識が児童に芽生えらると思われる。

学びを連続させるために

(1) 情報収集の前に仮説を立てる

学び続ける児童の育成のために取り組みたいことは、仮説を立てることである。仮説を立てることは、児童の思考力や探究心を育むことに繋がる。立てた仮説をもって話し合いを行う。その後、情報収集を行うことで、学習内容への理解が深まる。さらに、仮説が誤っていた場合も、その理由を考察することで新たな学びに繋げることができる。こうした過程を繰り返すことで、児童は主体的に課題の解決に取り組み、学びの質を高めることができる。昨年度の3年生の授業で、「たくさんの小さな実が、みかんになるのだろうか」という課題に対して、「全部なる」「全部ならない」で話し合いを行っていた。この意見について話し合った後、解決するためにどのように情報の収集を行うのか考えを出し合っていた。このように、「仮説を立てる」を大切にすることで、児童の思考力や探究心を育むことに繋がると考えられる。

学びを連続させるために

(2) 情報収集の仕方を工夫する

学び続ける児童の育成のために取り組みたいことは、情報の収集を工夫することである。昨年度の情報の収集の仕方には、課題があった。例えば、課題を調べる際に、インターネッ

トを使って調べて分かって満足して、学びが途切れるという場面があった。学びを連続させるためには、様々な情報の収集をおこなう必要がある。そして、様々な情報を多角的な視点で分析することによって、深い学びや新たな問いにつながると予想される。

【情報の収集の仕方】

アンケート・インタビュー調査で情報を収集する。

個人インタビューで情報を収集する。

図書館や図書室で情報を収集する。

インターネットで情報を収集する。

観察・見学で情報を収集する。

情報の収集をする際に、児童と一緒に、どの方法で情報を収集するのかを検討する必要がある。そして、自覚的に情報収集させるため、カードを活用すると良い。今どの方法で、どうやって情報を収集するのか明確にして取り組む。このような取り組みで、新たな問いが生まれ、探究のサイクルが回り、学び続ける児童の育成に繋がる。

学びを連続させるために

（３）問いの質を向上させる

学び続ける児童の育成のために取り組みたいことは、問いの質を向上させることである。学びが連続していかないことの理由として、問いの質に課題があると考えられる。昨年度、体験や出会いを通して、問いをもつことができる児童が増えたが、学び続けることには繋がらなかった。学びを連続させるためには、問いの質を高めることが重要であると考えられる。問いの質の向上のためには、教師が意図的な働きかけをすることが重要である。例えば、児童の関心・興味をもったことから学びを連続させることや、切実性をもった問いを作ることができるような体験学習・出会い学習をおこなうことである。さらに、一つの体験活動・出会い学習においても様々な問いがでることが予想される。その中で、どの問いであれば、探究的に学び続けることができるのかを児童と検討してから取り組むことも必要である。（リフレクション型の授業）その学習活動の積み重ねにより、学び続けるための問いに繋がる。

学びを連続させるために

（４）問いを掲示する

また、学び続ける児童を育むために、問いについて常に意識できるような環境作りも行いたい。具体的には、問いや課題について教室に掲示するだけでなく、校舎に掲示して、どの児童でも見ることができるようにすることである。掲示を行うことで、児童が他学年の学習内容に興味をもったり、問いについて考える機会を増やしたりすることができる。

5 日常での取り組み

(1) 朝の学習・モジュール学習

- 朝の学習・モジュール学習 8:25～8:40 (15分間)
- モジュール学習では新出漢字の習得やYOMUYOMUワークシートに取り組み、国語力の向上を図る。

(2) ノートの使い方 (教科や学年の実態に応じて工夫する)

- 各ノートに日付を書く習慣をつける。
- 問題番号は、左から右に書く。
- 教科書やノートの枠外に小さく筆算をしない。
- 宿題ドリルノート・・・途中計算式があるかどうかをチェックする。(計算過程を重視する。答えを丸写しせず、わからないときは答えから類推して考えさせる。)
- 学年や単元，教科に応じて縦線を引き，インデントにする。縦線の左側には，ページ，問題番号などを書く。
- 問題と問題の間は一行空け，見やすくなる工夫をする。
- 直線は必ず定規で引く。「右手に鉛筆，左手に定規」を徹底する(利き手が違う場合は逆に)
- めあては青えんぴつ，まとめは赤えんぴつを使って囲む。
- 算数の文章問題は3点セット(横式，筆算，答え)でまとめる。

(3) 学習用具

- 筆箱のなかみは，削った黒鉛筆5本程度。赤青鉛筆は1～2本(折れた時は学校で削ってよい) 定規1本 消しゴム1個
- 下敷きを使う。

(4) 整った学習環境づくり

- ・黒板の上の掲示・・・しない
- ・教室の掲示物・・・同じ作品は一か月以上貼らない。
(学習に必要な，あるいは意欲をもたせるような掲示物を考える)
- ・学び合うための掲示・・・「話すルール」「聴くルール」のクラスごとの設定

(5) 家庭学習の充実

○基本的に「音読」・「漢字」・「計算」の3点を出す。クロムブックを活用する。

○家庭学習のてびきを発行し、保護者と連携して取り組む。

○こどもたちの自主性や意欲につながる自主学習を工夫する。

(6) 読書活動の充実

○ 季節の飾りや新しい本・学年の本紹介コーナーを作り、足を運びたくなるような図書館にする。

○ 読書週間「読書チャレンジ」「読書のパズル」に学級単位で取り組ませ、読書の習慣化を図る。

○ 図書委員による「図書館まつり」を行い、本の読み聞かせや紙芝居を行う。

○ 月に「低学年は6冊，中学年は4冊，高学年は2冊以上」図書館で本を借りることを目標にする

◎教職員間の交流

・全学年での研究・公開授業，事後検討会の実施

・積極的な授業公開・参観の実施

・研修だよりの発行

研修会等を通して…

・個々の目標や課題の設定

・取組に対する振り返り

・個々の取り組みや悩みについて意見交流

6 提案授業・全体研修会について

(1) 提案授業について

・ 1年間を通して，各学年で提案授業を行う。

事前説明会→提案授業→事後検の流れ

※ 事前説明会の日は直前に設定（30分程度）する。

・ 本年度の研究に対する仮説を実践して検証していく場にする。

通常の授業で年間を通して取り組んでいることを提案するという意識をもつ。

・ 参観者は、こどもの反応と授業者の手立ての両方を同時に観察する。

授業の良し悪しではなく，こどもの学びの姿から授業の在り方を考える。

(2) 全体研修会の持ち方（人権との関連）

・ 全体研 → 研修4本＋人権2本＝計6本

・ 公開研 → 年間で、研修か人権を1人1本以上

⇒ 専科の先生は、授業を行っている教科を公開する

(3) 学んだことを表現する場(「まとめ・表現」の段階)の設定(地域への還元も含む)

〈日々の授業で〉

・ 問いについて話し合う。【話す・聞く】

・ 書いてまとめる。【書く】

→ 国語科との関連を意識し、こどもの学びの必然性に沿った活動とする

〈地域への還元〉

・ 各学年でお世話になった地域の方へのお礼の気持ち伝える。

＜学年単位＞

→手紙を通して地域の方にお礼の気持ちを伝える。

→地域の方を招いて学んだことを発表する。

＜学校単位＞

児童集会の際に、お世話になった地域の方にお礼の気持ちを伝える。

5 研究の組織図

